【罪】の謎

凛莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【罪】の謎

【Ｎコード】
Ｎ９５４９Ｗ

【作者名】
凛莉

【あらすじ】
この国には解いてはならない事件があった
なんの事件かは知る人はいない
それが【罪】　そして不思議な現象を
人は「【罪】の謎」と呼んだ
私はそれを解いてみせる
そんな意気込みとは裏腹に、
少女が迷い込んだのは不思議な世界でした

楓のメモ（前書き）

こちらは登場人物とか、魔法名とかです
どんどん追加されていくのでお楽しみに！

楓のメモ

～登場人物～

主要人物

本明（ほんみょう）　楓（かえで）♀　１６歳、高１

一言メモ：魔王とか世界よりも【罪】の方に興味がある人

【罪】の謎を知り行方不明？

大口（おおぐち）　妃和（ひより）♀　１５歳　高１

一言メモ：素直だけど柔道４段の強者　タックルは痛い　【罪】の謎を知り行方不明？

アウロ＝ルーナ　♀　多分１６歳　多分高１

一言メモ：強い　エルフと獣人（ヒューニマル）のハーフ。可愛い　魚を見ると・・？

オリス＝ラ・リオン　♂　？

一言メモ：照れ屋だけど強いシアン　とにかく強い　強い

シー＝ロンア　♂　？

一言メモ：軽い獣人（ヒューニマル）　魔法が強い　とても強いがオリスには弱い

カンゼ　♀

一言メモ：風の精霊　今は精霊使いによって保護されている

アインゼ　♀

一言メモ：氷の精霊　今はカエデ達と行動している　暑い所が苦手

ファイリア　♀

一言メモ：火の精霊　こちらもカエデ達と行動中　水が苦手

脇役的人物

ガルモス＝ルーリ　♂　多分４０代

一言メモ：「始まりの村」にある学校の理事長　綺麗で物知り。

スズ・エルサ　♀　年齢は教えません！！

一言メモ：ＳＳランク担任　真面目だけど天然で面白い人

ショウ＝ネ　♀　普通秘密でショウ？

一言メモ：名前の通り「～しょう」となるとカタカナになる　外国人っぽい人

アイシア＝アイズ　♀　・・９

一言メモ：愛想はない喋り方だがかわいい　体温は氷のように冷たい　氷の谷の姫

ファイン・ル・イアン　♀　年齢を聞くとは、無礼者！

一言メモ：火の谷の女王、気高く美しい人　老けてなどいない　体温は火のように暖かい

～魔獣　モンスター～

バツメ：ツバメに似てるからこの名前　凶暴　学校にしか住んでない珍しい魔獣

スライム：いつもの弱いモンスター　たまに綺麗な玉を落とす

火竜（ファイアドラゴン）：強いくウロコが赤い　そして少し小さめ　氷や水に弱い　火を吹く

〜魔法集〜
魔力（マナ）：全ての魔法に使う　修行等で多くなる
水晶空間（クリスタルルーム）：水晶型の収納棚のようなものいくらでも入る
氷球（アイスボール）：初歩的な魔法　５回までチャージ可、氷属性魔法なら重ねて使ってもＯＫ
氷槍（アイススピア）：少し扱いづらい魔法　槍のような鋭い氷で敵をひとつき　凍らせる
回復魔法（ヒール）：その名の通り怪我や病を治せるが魔力（マナ）をたくさん使う
水の壁（ウォーターウォール）：水の壁　水属性なので火属性とは使えない
敵を囲むのも自分達を守るのにも有効防御魔法では比較的楽だが少し弱い
圧縮部屋（ミニマム・ルーム）：目では見えない家キーワードを言うと中に入れる絶対安全だ
火槍（ファイアアロー）：火の槍　敵を囲んで燃やし尽くす　水属性に弱い
水矢（ウォーターアロー）：水の弓から矢１本と水の矢数十本が上から降ってくる冷たい
フィア：人や物の術を解くことができる　ただし下級分解魔法なのであるアイテムが必要
暖（ホット）：暖をとるための魔法　火がなくてもあったかい便利な魔法

〜メモ帳〜
種族は４種類　―人間とエルフ　獣人（ヒューニマル）とシアン
人間は私とか　エルフは耳が少し特徴的で美形が多く、射的の天才ばかり
獣人（ヒューニマル）は耳やシッポ、手足が猫や犬、など動物の形だが他は人間。魔法が得意
シアンは珍しく、何をやっても天才　特徴は白い目。だが数は少なくなってきている

第1話　ここはどこ？

罪？　わるいこと　謎？　ふしぎなこと
よのなかにはまだむずかしいことがいっぱいある
このくにには「罪」といわれるじけんがある
それにはなぞがいっぱいなんだ
わたしはぜんぶといてみたいな
それがわたしのゆめ
◆◆◇◆◆
「おぉーういかーえでーぇ！」
「ゴへァッ」

突撃したのは幼馴染の大口妃和　これで「ひより」らしい。
面倒なので「ひよ」って呼んでる。

「あっちゃー、ごめんねー楓（笑）」

笑いながら謝ってる。　さっきのタックルは彼女お得意のもの、痛い。
軽く頭をポカリ。

「えへへ・・　楓はさっきから・・本？なんの本？」
「んー、いつもの」
「へー」

私の名は本明　楓　自称探偵である。　とりあえず高1です。

この国・・というか街にはある一つの事件がある
解けないし解いてはいけない　解いたものは　消えてしまう

【罪】　という名の事件
私はその謎を解くのが夢・・・

「あ・・・」
私は小さく声を出す。
ひよは見ようとするのを私は止めることに
「見ちゃ駄目！」
「なんで？」
急に大声をだされて驚いてるひよ
　パタン・・
私は読んでいた本を閉じた　そのページにはしおりが挟んであった。

「どうしたの？」
ひよは聞く
「・・・」
私は答えない
でも答えなきゃ
「そのしおりが挟んであるページには、【罪】の謎が書いてあった」
つまり、私は消える
「私は平気　どこに行くのか知りたいもの・・・」
「そんな・・・
ひよの声をかき消すくらいの大きなチャイムの音
そしてチャイムの音が止むと同時に
私は消えた
「・・楓？」

◇◇◆◇◇
頭が痛い　ここはどこ？
真っ暗な闇の中・・？
「う・・・」

急に光が差し込んでくる
目の前に見えるのは・・村？
どこかで見たことがあるような、ゲームのような世界だった
広場らしいところに私は立っていた
「うぉぉぉ勇者様ぁぁぁぁ！！！」
「！？」
人だかりができる。だがこの人のテンションはおかしい。
んで、勇者？頭がどうかしているのだろうか
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ本物だぁぁぁぁぁ！！！！」
「勇者様ぁぁ！」
ここの人はテンションおかしいのだろうか
とりあえずまとめ
【罪】の謎を知ってしまい消えた
目覚めると村（ここ）に
んで村人（？）に囲まれて
今・・・か
どうなってんだこりゃ・・
「ちょ、ちょっと待ってください・・私は勇者じゃありません！」
「何を言っているのですか！　その服！貴方様が勇者様でしょう！」
「は・・服？」
着ているものを見る
「なんだこりゃあああ！！」
動きやすく軽い鎧　いつのまにやらついてる髪飾りやネックレス。
腰には短剣
まてまて、私はさっきまで学校の制服だったはずだ・・・
てか、ネックレス光って・・・
「やっぱり貴方様は勇者様だあああああパーティーの用意はまだかぁぁぁ！？」
うるさい
さっきからなんなんだ・・・

やいのやいのしてるうちに逃げちゃえ

「でぇぇ?!」

走るよりも飛ぶに近いほど早い。

とりあえず近くの隙間に隠れようか・・・

「んー・・」

さっきから頭に浮かんでるのはなんだろうか?

・・水晶空間(クリスタルルーム)・・

なんじゃこれ?玉?・・・の中に本?

混乱するばかりだ・・・

「えい」

本がとれた　どうやら収納棚ならぬ収納玉らしい

本を開く・・どんな本かな?

「読めねぇぇぇぇぇぇぇ!」

見たこともない文字がズラズラ・・・あぁ、頭痛い・・・

しかし・・ここはどこだ・・何がしたいんだ・・

謎は深まるばかりだなぁ

第1話　ここはどこ？（後書き）

初投稿で色々拙いところがあったり、誤字脱字があるかもです。
楽しんでくれるといいなぁ・・・

さぁ、罪の謎を知ってしまった楓ちゃん。どうなることやら
彼女の苦悩は続く・・？

第2話　現状把握しました

さて・・・どうしたものか・・・
面倒なことになったなぁ
本でかいし重いし
水晶玉にしまっちゃえ☆
よし、どこか別なところへ行こう
うん、そうしよう

辺りを確かめて・・・
ダッシュ！

向かい風だよ・・痛い
風が痛い・・・
うん？鏡？
全身を見ておこう・・・

止まろうとしたけど止まらなかった
お母さん・・車がすぐ止まらないって意味、やっと分かったよ・・
高1にして・・・

鏡を見て私は絶句した
「な・・・なにこれ」
茶色がかった黒髪が　銀髪になりました。
どうなるんだ私っっ・・・
とりあえず髪飾り似合ってないので
むしりとって捨てた

「あれ？勇者？」

やばい、見つかった・・・
と思ったら後ろにもう追っ手がいました。

「勇者様っ！どこへ行ってたのですか！」
逃げてただけです
話は無視して質問してみようかな？
「ねぇ、ここはどこ？んで何が起こってて私はなんでこうなってんの？」
「ここは「はじまりの村」といいます、そして今・・」
「ブフッ・・」
笑いこらえきれないよ・・ゲームみたいじゃん・・
「いいですか？」
私は何回も頷く
「今、魔王が復活してしまい、世界を乗っ取られてしまうのです・・
そして
　貴方様が【罪】の謎を解いたので、こちらの世界に来たのです。」
「じゃあなんでこんな服と髪なの？」
「それは貴方様が勇者だからですっ！！」
自信満々に言われても・・
答えになってないし

そして2時間弱という長話に付き合わされた
とりあえずザックリ言うと

魔王が復活！世界が危ない、というところで私があの本で【罪】の謎を知って
ここに来た　こんな姿なのは勇者だから、らしい。
そして私は
魔王を倒せば帰れる

よし、魔王様ね

んで、長話の中に、「勇者様はまだ未熟なのでこの地図に従い学校へ向かってください」か

以外とでかいな、ここ

さっさと帰るためにも行くかー

学校かー・・ひよ今何してるかなー・・・

第2話　現状把握しました（後書き）

とりあえず1話目に少し小さな黒歴史ができました・・・

そしてそんな2話目

楓ちゃん鏡みるまで髪の毛の色もわかんなかったみたいです

次回は少し進展する予定です

第3話　友達

「こ・・こか・・・・」
走りすぎたせいで息が・・・

「・・・でかっ！？」
普通の学校の学校の2倍はあるだろう・・
うん？何か書いてある？

『いらっしゃいませ、勇者様』

あー・・うん、想像はしてたよ
中に入ろうか・・
◇◇◆◇◇

「・・貴方がカエデ様ですね？」
「あー・・はい、様はやめてくれます？」
「いやいや、偉大な勇者様ですから・・」

ここは理事長室、私の前にいるのは・・理事長のガルモスだ
名前ゴツいですガルモス理事長
外見はいい人にしか見えない
・・・女性みたい

「カエデ様にはSSランクコースへ編入してもらいます」
え・・・SSランクって一番レベル高いよね・・・
ここの世界の文字すら読めないのに・・

「あのー・・文字とかほぼ読めないのですが・・・」

「大丈夫です、自然と覚えますから」
くそぅ・・なんか可愛い笑顔・・・

「じゃ、教室へ行きましょう！」
「はい・・」

「今日は転入生を紹介します」
「エルサせんせーい女の子ですかー？男の子ですかー？」
「はいはい静かに」

「入ってきてー　勇者のカエデちゃんです！」
「ヨロシクオネガイシマス」

あぁ、緊張でカタコトだ・・・

「カエデちゃんには・・・アウロちゃんの隣ね」

アウロちゃん・・・か・・かわいい！

「カエデちゃんよろしくね　アウロでいいよ」
「こっちこそよろしく　私もカエデでいいよ」
声も可愛い・・

「後で校舎案内してあげる！」
「うん、ありがとう」

数分で友達になりました

第3話　友達（後書き）

長さがまだどのぐらいでいいかわからない凛莉です。

カエデちゃんは可愛い物好きです

アウロちゃんもカエデちゃんが好きなようです。

友情的にね

次は校舎案内になります　しばらくは学校生活になる予定っ

第４話　校舎案内はキケン

キーンコーンカーンコーン・・・

授業の終わりのチャイムだ　これから休み時間
アウロに校舎案内してもらうことになった

「カエデ、はいこれ」
手渡されたのは・・ハンドガンと・・盾？
「え・・あ・・」
驚きを隠せない私に、アウロがこう説明してくれた

この校舎には、「バツメ」と呼ばれるツバメに似た黒い魔獣、危険な獣が住んでいる
どこから出るのかわからない　くちばしでつついてくる
好物は「人」だという
新入生、転校生が襲われやすいので
校舎案内の時には遠距離に効くハンドガンと
攻撃を防いでくれる盾を持って歩くという校則が出来た

先生達が倒せばいいのになー・・

「先生達が倒せばいいのに・・って考えてるでしょ？　図星でしょ」
思考を読まれていた・・・アウロちゃん恐ろしい子

「そうもいかないのよ、バツメを倒そうとした先生や生徒、魔術師も来たわ」
「もしかして・・・」
「その通り、バツメは攻撃や魔法をすべてかわして、皆食べられて

しまったわ」
・・・マジデスカー

「・・さ、急がないと全部回れないわよ　行きましょ」
「おー・・」

この校舎は４階建てクラスはＦからＳＳまで
１Ｆには全クラスの下駄箱、体育館、Ｆランク　意外と１階は少ないの
１Ｆの他の空部屋はバツメの巣になったらしい
２Ｆには職員室、ＥとＤ、Ｃランクがあり、理科室、調理室等がある
３Ｆには・・・

バツメがいた

「えっえぇ・・えぇぇぇ！？」
「カエデ、下がってて！」

アウロは見事、一発、二発とバンバン命中していく
時折髪から見える耳はなんとなく少し長く尖っていたように見えた

バツメはあっという間に倒された・・というより気絶した　しばらくはおとなしいだろう、と

気を取り直して３Ｆには、ＢとＡランクがあり、図書室、音楽室、図工室（？）
ここにも１箇所、バツメの巣があった・・・
４ＦにはＳランクとＳＳランク、食堂　魔法訓練室　訓練室　があり、バツメの巣はなかった

「こんな感じかな？」
「ありがとー　いやーバツメってデカイね・・アウロもかっこよかった！」
「えへへ、ありがとう　あと、このハンドガンの弾は麻酔弾だから、何回かすれば寝ちゃうのよ」
「倒さないの？」
「バツメは一応ここにしかいないから・・無闇に倒してはいけないの」

「あっ・・カエデ！急がないと授業はじまっちゃう！」
「うわ・・いそげー！」

第４話　校舎案内はキケン（後書き）

バツメって名前はほぼ適当に決めた凛莉です。

魔獣とモンスターどっちがいいかなーなんて考えてたら
アウロちゃんエルフ説誕生
次回は魔法、語学、武術の特訓（授業）にはいります
ではではっ

※エルフってのは美人でスラリとしてて弓とか得意で耳が長くとんがってるよ！
（長くないのもいるけど）

Secret story1　楓はどこ？（前書き）

こちらは本編とは違う番外編的なものです。
第1話にて置いてけぼりのひよ視点にて進めていきます

Secret story1 楓はどこ？

「・・楓？」

楓が消えた・・そんな・・・

そうだ・・！本！　私も本を見れば・・

本を開ける　私の目の前に広がるのは
真っ白なページだけ

前ページ白、もちろんしおりが挟んであったページも・・

「ひよ？どうしたの？」
「・・ごめん、頭が痛いの、保健室行ってくるね・・」
「お大事にー」

どうしよう・・楓が・・・

どこいっちゃったの？楓・・

◇◇◆◇◇
「へ・・ヘックション！」
頭痛いと思ったら・・風邪か・・・

あれ・・本棚の本が落ちてる・・ひまつぶしに読んでみよ・・・

【　　】
この本名前がないな・・まぁいいや・・

寒い・・ベッドで読もー・・

「私はあなたよ　あなたは――」

「わ・・た・・し・・」

これ・・・【罪】だ・・・謎も、なぞなぞみたいなんだね・・

あれ？私もしかして消えちゃう？　妃和、人生最大のピーンチ

◇◇◆◇◇

「うー・・・」

ここどこ？真っ暗で何も見えない・・

ザアッ・・

「冷たい・・風？」

光だ・・眩しい・・

ここが消えた後の世界なのかな・・

楓にも会えるかな・・・

「おぉぉ！貴方は――」

Secret story1 楓はどこ？（後書き）

ひよちゃんも異世界入りいたしました

会えるようにしておかないとなぁ・・

でも当分先になりそうです。

第5話　実力　奇跡　まぐれ

「ハーイ、今日はー魔法訓練をしまショウ！」
「はーい」

前にいるのは訓練担当のショウ先生　外国人っぽい金髪に青い瞳・・
でもかっこいい女の人

「カエデ、行こ？　遅れちゃう」
「あ、アウロまってー・・」

思ってたんだけど足速いね、アウロちゃん

［魔法訓練室（マジシャンルーム）］

「ハイ、今日は回復魔法（ヒール）と氷の槍（アイススピア）を訓練しまショウか」
ひ・・ヒール？ハイヒールのこと？・・なわけないなぁ・・
「カエデちゃんはマズ、ワタシと一緒に基本を学びまショウ」
「はい」

魔法というものは、自分の精神の一部に、魔力（マナ）が存在し、その量は
人それぞれ
多ければ多いほど高レベルな魔術師に、少なければ補助程度の魔法
が使えるようになる
異世界から来た者は使ってみるまで未知数　ある者は全くなかったり
ある者は多すぎてオーラがでてたという・・
上手に使えば使うほど　魔力（マナ）を増やせる

「わかりましたか？」

「はい」

レッスン1．魔力(マナ)を氷球(アイスボール)にしてみよう

「自分の魔力(マナ)を頭で氷球をイメージして・・手に・・こう・・」

フワ・・・

少し小さめだが1つ、氷球ができた　なにこれ楽しい！

もう一回・・

フワ・・・

少し大きめのができた　ショウ先生どうですか？

「ワォ・・・」

驚いてる・・何かした？

「素晴らしい！素晴らしいヨ！」

「どうも・・」

「次はこれと、これ、そうそうこれも！」

3つも無理ですよ・・

「うん、ここまで出来れば皆と同じく授業ができそうデス」

「ど・・どうも・・・」

覚えた、というか覚えさせられたのは

回復魔法(ヒール)と氷槍(アイススピア)そして水の壁(ウォーターウォール)・・・

最後のは防御魔法らしい・・

まだ終わらない授業　次は臨時で武術訓練だそうな・・

そういえばショウ先生、これは実力だろうか・・それとも奇跡・・・・

まぐれ・・？

とつぶやいていたけど、なんの意味かはわからないや

第5話　実力　奇跡　まぐれ（後書き）

魔法の名前が思いつかない凛莉です。
だんだん罪と関係なくなっている気がしますが
勉強して魔王に打ち勝つんですよ！きっと！！
次回はショウ先生のふっとばして次、いきまーす

第6話　種族

「あ、カエデさんこっちこっち・・」
担任のスズ先生・・なんだろうか・・まさか怒られるのか？
「はい、ここ！今日からここがカエデさんの家ですよ～」
木の寮？変なのー
「部屋は・・うん、アウロさんのところが空いてるからそこにしましょう」
わーい　アウロと一緒だー

「アーウロッ！　寮、一緒の部屋だよー！」
「・・えっ？や、やったね！」
何か焦ってるみたいだけど・・まぁいっか

「アウロって髪ながーくてふっわふわで綺麗な金髪だねぇー目も綺麗な青だし」
「そうでもないよ、カエデの髪の色の方が綺麗よ？」
「「クスクス・・」」

「・・・」
「どうしたの？」
「カエデにだけ、教えてあげる　皆には絶対秘密だよ？」
「う、うん」

アウロは真剣な顔でいつもよりも低い声で言っていた
頷くことしかできなかったし　秘密を守る事を誓うことしかできなかった

「・・これ」

アウロは髪を上げると、今まで見えなかった耳が見えた
その耳は普通の人よりも、少し長く、尖っていた
［エルフ］という種族は皆美形でスラリとし、耳が長くとんがっていて弓や魔法が得意な種族・・

「私ね、エルフなの・・小さい頃耳が原因でいじめられて・・」
「ふーん？　私はかっこいいと思うな　それにアウロはアウロだし！」
「・・ありがとう！」
「うん！」

そういえば・・後3日でまた冒険に行くんだよね・・
「・・ねぇアウロ　勇者だから、もうすぐまた旅にでるんだ」
「・・そっかカエデ、勇者だっけ・・」

「だから、その時、一緒についてきてくれない？」
「え？　そんな・・私なんて・・」
「アウロじゃなきゃダメなの！」
「・・・・んじゃ、よろこんでついて行く！」
「ありがとーぅ！」

「ハイそこー、はやくねまショウ！消灯時間はすぎてますヨ！」

「あ、ショウ先生・・はーい　おやすみなさい・・」

「怒られちゃったね」
「ねー」
「んじゃ、おやすみアウロ」
「おやすみ、カエデ」

魔王を倒すのに必要なお供は人数は最低４人って村の人、言ってたよね・・後３人・・どんな人だろ・・

【罪】の正体って・・・なんだろう

そう考えているうちに、眠っていた

第6話　種族（後書き）

今日のあとがきは特になにもないです

次回は冒険へ出発です！

残り3人はどうしよう・・・

第7話　出発

「カーエーデ　あーさだよ？」
「ほげ・・？」
時計を見るとまだ午前5時半・・目覚ましもなってない・・？

「おはよー！」
「おはよー・・まだ早いんじゃない？」
「私はいつもこうだよ？」
アウロちゃんいい子なのねー・・眠い

「着替えたかにゃー？　ついてきてー」
『にゃー』・・だとぅ・・くそぅ・・かわいい・・

［的当て］

「ここはねー、まぁ命中率を上げるための場所！　私は毎朝行くんだ」
「へー・・だからバツメとの戦い上手だったんだー・・」
「そうでもないよー／／／」
いや、普通に凄かったです

魔法、弓と遠距離物ならなんでもＯｋなここ、特訓にはもってこいだ

「・・カエデもすごいじゃん！初めてでしょ？」
「もとからこういうのだけは得意だったから・・」

「お、アウロ、そろそろ朝食の時間だ、行こう？」
「そうね、いきましょうー」

今日のメニューは「スズノメ　ライスパン　アイ　サカナ」
「スズノメ・・？アイ・・？」
「にゃー！今日は私の好きなおさかにゃー！」
！？

「あ・・昨日言い忘れてたけど、私はエルフと獣人(ヒューニマル)のハーフなの」
「獣人ってあれ？猫とか犬とか、動物の手足とか、耳とか尻尾があるんでしょ？」
「うん・・私はエルフだけど、魚とかみると・・耳としっぽ・・」
アウロには可愛い猫耳としっぽ
余計可愛いね・・

「あ、いたいた、お二人とも、こっちへ来てください」
「あ、はい」
「わかりました」
が・・ガルモス理事長・・私達なにかしました！？

［理事長室］

「えーっと・・カエデさんは今日の午後に冒険へ行くということでしたので・・」
手渡されたのは入学の際一時保管してもらってた鎧・・なんかグレードアップしてる
剣もかっこいいし・・

「で、アウロさんはカエデさんと一緒に行く、ということだったので、アウロさんにも」

おぉ・・動きやすそうな鎧！弓矢もかっこいい！

「「ありがとうございます」」

「・・ガルモス理事長、何故私が旅に同行するのを知ってるのですか？」

「んー・・私の能力だから、ですかね」

「そういえばそうでしたね」

なんのこっちゃ・・・

「・・さておき、カエデ様にはこれを、是非読んでください」

3冊の本　古そうだがとてもすごい物と見える・・

「さぁ、二人共、皆に気づかれないうちに行ってください」

「「はい」」

「気を付けて・・」

これから、どんな冒険が始まるのかな・・

第7話　出発（後書き）

どうも、凛莉です
やっと学校編終了です。
これから冒険編へと移りますー
ではー

第8話　特訓の成果

ガサガサ・・

「そこかぁっ！！」

―ドシュッ

・・・ドサッ

「わーい！スライムにあたったー」

「その調子にゃー　カエデー」

「アウロ、それいつまで続くの？」

「それがわからないのにゃ・・ごめんね」

可愛いからよし、としよう

「あ、なんか落ちてる」

「［スライムパール］？綺麗だしいっかー」

「そんなものがあるとは・・しらなかったにゃー」

「とりあえずしまっちゃおうねー　：水晶空間（クリスタルルーム）：」

ついでなので3冊の本も収納

「カエデー　特訓しよっか！　私についてきてね」

天使のような微笑み・・怖い　後獣人（ヒューニマル）も治ってるし・・

「ミギャアアアアア！！！」

私の叫び声が森中に響いた

「ア・・アウロさ・・キツいで・・す」
「んー・・さっすが勇者カエデ！上達が速いね」
「それは・・どうも」

「日も暮れてきたし、寝よっか」
「テントとかは？」
「・・圧縮部屋（ミニマム・ルーム）・・」

出てきたのは・・って・・みえない・・

「んーと、『ただいま』って言ってね　私はお先にー　ただいまー」
シュポーン
あれ・・アウロ消えちゃった・・？
と・・とりあえずこう？だよね・・
「ただいまー」

「おかえりー」
「広・・どうなってるの・・？」

「んーっと、学校で習ったんだけど、これは瞬時に小さな家を造り、私達が小さくなって入るの」
「へー・・」
「定員は2人まで　『ロック』って言えば、外からの攻撃を防いでくれるの」
「すげー」
「出るときもロックって言えばいいんだよ。　ロック！」

カシャン

「おー・・」
「さ、寝よう」
「はーい　おやすみー」
「おやすみー」

「・・デ・・カ・・デ　カエデ！」
「はいいい！」

「おはよ」
「おはよー」
「朝ごはんできてるよー」
「おいしそう！」
「んじゃ、食べ終わったらまた特訓ね」

「え・・・・」

今日も魔法、魔力（マナ）を効率的に使う方法・・武術、射的と特訓しました。
地獄です
アウロちゃん凄い・・

そんな日が続いて3日目・・・

バササササ・・
森中の鳥が飛んで行き、動物達は皆逃げた

〔ガァァァァ！〕
低く、恐ろしい声　森が揺れている様だ・・
少し小さめの火竜（ファイアドラゴン）だ
小さくても威力は凄い物だ・・

「カエデ！氷属性魔法を使って！」
なるほど、火は氷（水）に弱いのか・・よし・・
・・氷球（アイスボール）・・

５個までチャージできる便利な魔法だ　しかも他の氷属性魔法とならば重なってもＯＫ
これだけじゃ、倒せない・・氷槍（アイススピア）だな・・
・・氷槍（アイススピア）・・

・・よし

「！！」
「アウロ、危ない！」
「・・え？　ぐっ・・・！」
「アウロ！」

「カ・・カエデ、早く撃って・・」
「わかった・・」

アウロは幸い爪がかすっただけだった　だが血は結構出ている
早く倒さないと・・

「いっけえぇ！」

パキィィッ

パリーン

どうやら氷の彫像になって、砕けたのだろう　跡形もなくなっていたのだから

「・・っよし　アウロ　大丈夫？」

「う・・うん」

「：対象アウロ：　：回復魔法（ヒール）：」

アウロの怪我が消えていく・・でも結構魔力（マナ）を使う魔法だからそう何度も使えないのが残念だ

「・・ありがと、カエデ」

「よかった」

「すごいよ？カエデ、あれ、結構大変なのに・・しっかり命中してた！特訓の成果かもね！」

「そうだね、アウロのおかげだよー！」

「「クスクス」」

「さ、今日はもう寝よう？もう日も暮れてきたし、疲れたでしょ？」

「そだね」

「：圧縮部屋（ミニマム・ルーム）：」

「「ただいまー」」

「ロック！　んじゃ、おやすみなさい」
「うん、おやすみー」

「あれが・・〔勇者〕カエデとエルフと獣人（ヒューニマル）のハーフ、アウロか・・」
「ふぅーん、なかなか面白そうじゃん？」

第8話　特訓の成果（後書き）

少し長くなってしまいました！

怪しげな二人組・・そして新しい魔法、そして実戦という
なんというか、長かったです！
次はもうちょっと安定しないかなぁ・・
次回も進展する予定です！

［追記（？）］この回は誤字脱字が多いです・・気づいたところは
直しました
が・・・・まぁなまあたたか～い目でみまもってください・・

第9話　二人組

「うーん・・」
「どうした？シー」
「・・おなかすいた」
「・・・」
まぁ、シーの言ってる事は頷ける　勇者一行を追尾して3日目・・
ほぼ何も食ってないからな
・・俺も腹は減っている
「あ！オリス！勇者達移動してる！ボク達も行かないと見失っちゃう！」
「わかった、行こう！」

「ん？」
「どうしたの？カエデ」
「なんかみられてるよーな・・」
「・・やっぱり？」

「まぁ・・食材とか、色々なくなってきたから街へ行こう？」
「うん・・大都市［リーエン］へ」

「ふーん？リーエンに行くのか・・ボク達はどうするの？・・ってあれ？」
「まって・・ボクをおいてかないでぇー！」

「合計２０００Ｌいただきます」
「はい」

「おつりの５００Ｌです　ありがとうございました」

「こんなもんかな？」
「よし、じゃあ重いだろうからしまう？」
「そうしましょうか」
「：水晶空間（クリスタルルーム）：」

ドサッ
「ありゃま・・本が落ちちゃった・・」
あれ？これどっかで・・・
［チッ　チッ　チッ　チーン］
あの時のか！

「この本、読めないんだよなぁー」
「どれどれ？・・・あ、私読める」
「読んでっ！読んでくださいアウロ様！」
「そんなことしなくても読んであげるよ」
アウロちゃん苦笑い　引かれたっ

・・勇者である貴方に託す　我の知識　仲間の力を借りて　読める
この本　仲間は大切
　それもまた重要　勇者には読めぬよう術がかかっている　術の奥に
　本当の知識が記されているであろう・・・
「・・なにこれ？」
「とりあえず、カエデここで待っててくれる？」
「はーい」
・・本には術を解くための物が書いてあった　ここに全部売ってるから・・すぐ戻れるはず

「あ、一人になったよ？オリス、どうする？」
「・・ここでは人が多すぎる」
「了解　二人のほうが楽しめそうだしね」

「ただいまー」
「おかえりー」
「よし、準備は大丈夫・・」
「一回森の方へ行こう：
「わかった」

「雲の裏　影の裏　鏡の裏　元に戻せば皆表　元の姿を現せ：フィア：！」
パンッ
何かがはじけるような音・・本は・・
「うーん・・読めるけど相当難しいな・・今度でもいい？」
「いつもでもいいよ？カエデの好きなときにしよう」
「んじゃ、その時まで：水晶空間（クリスタルルーム）：　・・しまっとこ」

「よし、今だ！」

ガササッ

「！？」
「：火槍（ファイアランス）：！」
早い・・！何者・・
「あつっ・・」

「：水矢（ウォーターアロー）：」
バシャッ

「・・？」

「コンニチハ、カエデさんアウロさん」
「何者？」
「こいつら、魔王の手下かもしれない・・カエデ気をつけて！」
「うん・・」

「はいはい、あせらないでー」
「・・ここ数日全て監視させてもらった」
「うん　とりあえず自己紹介ね！　ボクはシー＝ロンア！シーって呼んで！」
「・・俺はオリス＝ラ・リオン　オリスと呼んでくれ」
そういわれましても・・フードで顔見えないです

「今の攻撃は何だったの？」
「んーサプライズ☆」
「・・・」
「アホ、今の火は強すぎだ」

特に害はなさそうだけど・・何なんだ？
「とりあえず、魔王まで連れて行ってくれないか？」

「カエデちゃん、耳かして」
「？」
小声でシーはこう言ってくれた
「オリスは仲間にしてくれ、って恥ずかしいから冷たく言ってるん

だよー」
「ぷふっ・・！」

「シー・・お前話しただろ・・／／／」
「顔真っ赤だよオリスー！」
「てめ・・・雷球（ライトニングボール）・・」
「ミギャアアアアア！」

「ひどい・・ひどいよオリスゥゥ・・うわぁぁん」
ないちゃった・・

「私は仲間にしてもいいと思う」
「アウロもそう思った？よし、決定だね　　オリス」
「何だ？」
「仲間にしてあげる！よろしくね」
「・・こちらこそ頼む」

「うわぁぁん」
まだ泣いてる・・
「特にこいつのことを・・」

にぎやかになりそうだ・・そして顔が気になるー！

第9話　二人組（後書き）

というわけで、仲間が増えました！
クールで照れ屋のオリスと軽いシーです

では、次回に続く

Secret story2　楓の立場と私

「あーぁ・・楓、どこにいるんだろー」
ここが消えた後の世界・・かな？ゲームみたい
しかもこんな格好だし・・

ここに来たとき、私は黄緑のローブのようなものを着ていて
胸には緑のネックレス
髪は白で目は緑・・
そして村人は私を「勇者のお共様」なんて言ってた
勇者って誰なんだろう？
とりあえず勇者がいるらしいところへ行こう

「へ・・ヘックション！」
「カエデ大丈夫？」
「うん、誰かが噂してるみたい」
「無理はするんじゃないぞ？」
「ボクがあったためてあげるー！」
「ありがと」
・・ひよ元気かな？

ガサガサッ・・・
「やば・・敵？」
（じー・・・）
ちっちゃい妖精みたいなの・・見てる

「ご主人様！私を旅のお供につれていってください！」
「え・・・」
「私が・・ご主人？」
「そうです　ご主人様はそのネックレスを持っているからです！」
「この緑、赤、青に光ってるやつ？」
「そう、それです　私は風の精霊「カンゼ」と申します！」
「んじゃーよろしくね、カンゼ」
とりあえず害はないし、多いほうが安全だよね

「やっと街の森まで来た・・」
「あ、あれは勇者様達ですー！」
「え、嘘？」
「あそこですー」
「あー・・あれ？　楓？・・に似た人かな」

「・・・　・・・！？　・・」
何言ってるか聞こえない・・・
うーん、違う人と勇者のお供かな？

「んー・・っと街で買った1ヶ月、絶対に取れない発信機のような粉？をかければいいんだっけ」
「そうですー　私がやってきますー」
「おねがーい」
スイーッ

パラパラ・・

「ヘックション！」
「クシュン！」
「どったの？二人とも」
「花粉かな？」

さて、行きたいけど私はちょっと用事を片付けるかな

「カンゼ、残りの精霊は何匹だい？」
「後・・2です！」
「りょーかい　んじゃ、いこう？」
「はいご主人様」

勇者との再開は・・後2週間後くらいかな

Secret story2　楓の立場と私（後書き）

今回も番外編です！
ひよ目線です
次回は本編へ進みます

第１０話　氷の谷

「ねぇ、二人とも」
「何だ？」
「なーに？」
「いつフード取ってくれるの？顔みたいんだけど」

「いいよ」
「・・仕方あるまい」

パサ・・・

シーは獣人茶髪（ヒューニマル）に青い目アウロと違って語尾に「にゃ」はつかないみたい
オリスは数少ないシアンだった　黒髪と白い目　白い目はシアンの特徴だ通りで強いわけだ・・

「んー、オリスさーさっき目みえたけど、茶色だったよ？」
「それは魔法で隠してるからだ」
へーそんなのもあるのか

「魔王の城ってどこにあるのー？」
「ん、んーっとねここから北に行って氷の谷に行き、その西のほうに行くと、火の谷があるから・・」
「そこを通り、北へ向かい海を渡ると魔王の城がある・・であってるか？カエデ」
「おぉ、あってるあってる」

「ねぇ、アウローごはんまーだ？ボクおなかすいたー」

「あ、できてるよー」
「わーいシチュー！おいしそーう」
「いつも感謝する」
「アウロごめんね、ありがとう」
「ううん、他にできることはないから・・・」

「うーん・・・！おいしかったー！」
「美味だった」
「ごちそうさまでしたー」

「氷の谷へ行く準備しよー」
「わかったー」
「もう準備済みだ」
「私も」
じゃあ準備してないの私とシーだけ？　なんか悲しい・・・

「ボク準備できた！」
「よし、出発だー！」

◆◆◇◆◆
～氷の谷にて

「・・・さむっ　みんな大丈夫？」
「カエデ・・ボク寒いの苦手・・・」
「私も・・カエデー寒いー・・」
猫は寒さに弱い！　って言ってる場合じゃない！
「：暖（ホット）：」
「オリスーありがとー！ボクら獣人にはぴったりの魔法だよー」
「あれ？寒くない？カエデは？」

「私も平気」
今のは魔法で体の周りを熱の結界で暖かいらしい
何でもありですね・・

ピシッ
「痛っ！何か当たったー」
「氷の粒？」
パシッ
「わ！」
ピシパシピシピシ
「どんどんあたってくるー！痛いー」

「ここに勝手に入っちゃダメ」
女の子？こんなに寒いのに裸足で青と白のワンピースを着てる・・

「君は？」
「・・言えない　とりあえずここに入っちゃダメ　勇者以外入っちゃダメ　他の人一回出て行って」
愛想がない話し方なのね・・そして私以外は出て行けと・・　何なんだ！
あぁ、みんなそそくさ行ってる・・

「みんな行ったから話す　ここは氷の谷　私はここの姫アイシア
勇者には　この氷の精霊託す」
女の子の後ろから小さい水色の髪をした精霊が飛んできた

「ご主人様ー！」といいながら私のところへ行く
「死なせたりしたら　承知しない　この谷　滅ぶから」
そんなに重要なのなら　渡さないほうが・・

「渡さないと　魔王まで行けない　残りの精霊２匹集める　火の精霊と風の精霊」
「アイシア様、そのことですが、精霊使いと思われる人が風の精霊を保護したようです」
「・・そうか　ならば後は火の精霊と　風の精霊を保護している精霊使いを　探せ」

「わかりました」
「用件はもう終わった　早く世界を救ってくれ　その子も頼んだ」

氷の谷の外ではみんなが待っていた
「おかえりー」
「遅かったね、大丈夫？」
「その後ろのは？」
「私、氷の精霊　アインゼと申します！」

わいわいと盛り上がってるけど
みんなは気づいていないみたい　誰かにつけられてる感じがする・・
気のせいかな・・・

第１０話　氷の谷（後書き）

祝１０話ー！（（
どんどん進めていきますｂ
アイシアさんカタコトだけど許して
冷たいイメージでなかったのです・・
次回は火の谷へ進みます

第１１話　火の谷は暑い

焼けるような熱い日差しの太陽
じめじめとまとわりつく湿気
そして地面が不安定な砂　見渡す限り砂・砂・砂

私達はそんなところにいる

「あつ・・」
「暑いです・・・私暑いのは苦手ー・・」
あぁ、アインゼが死にそう・・・
水筒に入れておこう・・汚いけど

「大丈夫？」
「な・・なんで3人は平気なのー・・」
「私は一応獣人（ヒューニマル）の血も引いていて、暑いところは平気」
「ボクもー」
「俺はどこにでも対応できる」
うらやましい・・と思ったのはアインゼも同じだったようだ

「うわ・・一段と暑い・・」
「アインゼ、大丈夫？」
水筒の中からひんやりとした空気と声が聞こえる
「快適ですー」
ふと見ると、アウロとシーもこの暑さにはかなわないようだ

「ここは暑いわね・・」
「暑いー！ボクここやだー」
「我慢しろ」

オリスさん容赦ないです・・シーが半泣きしている

「ようこそ、勇者ご一行　わらわはここの主　ファインじゃ」
真っ赤なドレスに金髪の髪　まさに女王というイメージだ

「さて、ここでは暑すぎるであろう？わらわに着いてくるがよい」
そう言われるがままに着いていくと、さっきよりは涼しい場所に来た
「ここなら幾分か良いであろう？ここは火の谷、暑いのは仕方がないことなのじゃ」
「はぁ・・」
適当に返事をしておこう・・

「ファイリア、来なさい」
「はい」
女王にそう言われ来たのは小さい精霊　これが火の精霊なのだろう
「初めまして　私はファイリア、火の精霊です」
「これからよろしく」
「よろしくね」
「よろしくねー！」
「・・・」

「さて、カエデよ　残りの精霊はあと何じゃ？」
「後は風の精霊を保護した精霊使いを見つけるだけです」
「ふむ・・そやつならもうじきこちらへ向かうそうじゃ」
お、ラッキー
「後３０分ぐらいであろう、しばらくこちらでお茶を飲もうぞ」
精霊使いってどんな人だろう・・

第１１話　火の谷は暑い（後書き）

さて、のこりは風の精霊！

いきなり急展開（笑）しますのでご期待ください！

では次回に続く・・

第12話　久しぶり

「うーん・・まいったなぁー」
氷の谷で精霊をもらおうと思ったら、精霊は勇者の所にいるなんて・・

「ご主人様、火の谷に勇者様がいます、合流しましょう！」
「本当！？今すぐ行こう！」
勇者との再会は予定よりも早くなったなー
楓も探さないとだし・・

「精霊使いってどんな格好なのですか？」
「わらわもよくは知らぬのじゃ・・ただ、白い髪に緑の目らしい」
「ねーねー女王様ー男なのー？」
「よく知らぬと申しておる！」
シー・・・もうちょっと敬語を使おうね・・

「カエデ、お茶のおかわり、いる？」
「うん、よろしくーアウロ」

「カエデ」
「何？オリス」
「幻影の魔法を教えてやる　こっちへ来い」
「はーい」
そういえばオリスはシアン、簡単にバレてはいけないから、幻影の魔法「幻影（シャインド）」で隠してるっけ
「：幻影（シャインド）：！」

「もう一回」
「：フィア：」
きつい・・・です

「こんなもんだろう」
私は髪を金色に目も茶色　目も少しつり目にしたこれが一番多い
土属性の格好
それに似合うように声も少しハスキーにした　別人です
「おぉーすごいじゃない」
「ふむ・・よくできておる」
「カエデすげーじゃん！」

ガサ・・
「ふむ・・？客人か」

少し遠くから聞こえる声
「火の精霊をいただけませんか？」
「そなたは何者じゃ」
「私は精霊使いです　勇者様達がここにいると聞き、精霊をいただこうかと」
「残念だが、火の精霊は私の元にはない」
「・・そうですか」
「火の精霊を持っている者はあっちにいるぞ？」
女王の少しからかうような声　無邪気に笑っている

どんな人かなー？精霊使い
「初めまして、私が精霊使い　ヨヒリです」
「初めまして」
顔をよく見ると　見慣れた顔

貴方は　妃和ね・・
私の幻影魔法もたいしたものだ

一番勇者らしい私に近づき、ひざまずいた
「勇者様、氷の精霊と火の精霊をいただけないでしょうか？」
「クスクス・・」
私はつい、笑ってしまった
「何がおかしいのでしょうか」
「その堅苦しいことはしなくていいわ、ヨヒリ」
「はぁ・・」
「さて、少し席を離れるね」
「うん、気をつけてね」
「はーい」
「わかった」

「さて、ヨヒリ　精霊はただではあげられないわ」
「ではどうすれば？」
「私達と一緒に、魔王を倒してほしいの、着いてきてくれる？」
「わかりました」
「ありがとう、ヒヨリ」
「！！　どうして・・私の名前を？」
幻影はまだといていない　あんな姿は見せたくないしね
「私の名は　カエデ　罪の謎を知るために魔王を倒す人」
「楓！」
「久しぶり、ヨヒリ」
「久しぶり」
そう言う妃和・・・ヨヒリの目には涙が浮かんでいた

第１２話　久しぶり（後書き）

どうも、凛莉です
急展開は楓と妃和の再会でした
「幻影といたほうがいいかな」
「いや、とかないほうが面白いかも、私が」
と思い幻影はといていません
では、次回は精霊編最後の予定です

第13話　3人の精霊

再開した私とヒヨリ　みんなの下へ戻り、話をした
ここまで何があったのか　一つ一つ

「・・さて、もう行こうかな」
「そうだな　もうここにいる必要も無くなった」
「女王様ーいろいろありがとねぇー！」
「無礼者！なんて口じゃ！」
シー・・最後まで・・・・

「それじゃあ、この世界を頼んだぞ」

そう言って女王様は戻っていった

「さて、2人の精霊ちょうだい」
「はい」

「あっ！カンゼだー！」
「2人とも久しぶりー！」
精霊達はキャッキャとはしゃいでいる

「・・　・・・・・　・・・・・・・」
何かひそひそと話しているようだ

「カエデ様、その剣をお借りします　ここにおいてください」
「ん、こう？」
「そうです」
「ご主人様はこのネックレスをカエデ様の剣の上に乗せてください」

「わかった」

「せーの・・」

「「「：融合（ガイン）：」」」

そして強い光が私たちを包んだ

「うわ・・っ」

「まぶし・・」

「ボクまぶしいのきらいー！」

「・・・」

「キャー」

「・・おわり？」

「カエデ・・あれ！」

「どうしたの？アウロ」

そこには、さっきまでいた精霊達がいなかった

ただそこには、黄金に輝く剣と　ネックレスが置いてあった

「・・今の魔法は物を3つまで融合できる物　彼女らと剣と光を」

「そして、あのこたちとネックレスと光を融合したであってるよねぇ？オリス」

「そうだ　だがいきなり出てくるのは驚くからやめてくれ・・シー」

「そうだ、カエデ、ヨヒリ、剣とネックレス、どう？」

「んー・・力が強くなった気がする」

「えーっとね、実態化（リバー）って唱えてみてー」

「実態化（リバー）」

そこには、アインゼとファイリアが剣の周りに、カンゼはヨヒリの肩にとまっている

「呼んでくれてありがとうですー」
「こうすることで私達と会話ができるので、いつでもどうぞ」
「でも、1日3回です　これだけは守ってくださいね」

「わかった」
「うん」

「もう私達はさっきので疲れたので寝させてもらいますー・・・」

あ・・消えちゃった

「さて、みんな、魔王に向かって出発！」
「「「おー！」」」
アウロ、シー、オリス、ヨヒリ（ヒヨリ）・・・あのさぁ、次、どこ行けばいいの？

第１３話　３人の精霊（後書き）

さて、精霊編終了です
再び旅編にもどります

最近スランプ気味・・
がんばって進めていきます

第１４話　次の行き先

「どこに行けばいいの？」
そう聞くと皆黙ってしまった
「ボク、知らない！」
「カエデ、ごめん・・私も」
そしてシーとアウロに続き
「俺も・・」
「私もー」
・・オリスやヨヒリまでどうしましょう
「オリスーなんか面白い話してー」
「・・じゃあその武器やネックレスについて話そうか」
オリスが指さしたのは私の剣とヨヒリの剣
「わーい」

オリスは話してくれた

私の剣は氷の精霊アインゼと火の精霊ファイリアが宿っている　通称精霊武器
精霊武器は昔精霊使いが誤って精霊と短剣を融合させてしまったためできたもの
力は精霊の属性も加わり、強大なものになったが、その精霊使いは争い等を好まない人だった
精霊使いは必死に元に戻す方法を調べた　だが手がかり一つ、つかめなかった
そして精霊使いは老い、その精霊武器を泣きながら、悔やみながら短剣と自分の気に入っていたネックレスを埋め
この世を去った　そしてネックレスは精霊の住処になり遠くへ行き

短剣は錆び、朽ちた

「という伝説みたいな話があるんだ」
「へーアウロ知ってた？」
「全然、精霊使いのヨヒリさんは？」
「ヨヒリでいいよ、アウロ　んー全然知らなかった」
「ボク、オリスの話面白いから好き！」
シーは論外ね・・・

「そして、そのネックレスがヨヒリのつけてるやつなんだ」
「そうだったんだ・・・」
「そういえば精霊武器・・だっけ？これの名前つけたほうがいいよね」
「そうだな・・気に入った名前をつけるといい」
「じゃあ、私もネックレスに名前つけてみる」

ヨヒリはすぐ決めた「カレス」カンゼのカとネックレスのレスをあわせたらしい
私は悩みまくった　こういうのは苦手なんだ・・・

「よし、決めた！」
私は「アイリア」に決めた　アインゼとファイリアを合わせたもの
気に入ってくれたかな

「そろそろどこか行きたいね」
「特訓もかねて迷いの森へ行ってみない？」
「いいんじゃない？」
「俺も異論はない」
「ボクもー！」

「次は迷いの森　出発！」
「「「「おー！」」」」

第１４話　次の行き先（後書き）

ちょっと遅れたし短いですー
そろそろネタが尽きてきましたｏｒｚ
次回はもうちょっとゆっくり進めたいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9549w/

【罪】の謎

2011年10月11日11時01分発行